

人と自然の新しい物語

バイオストーリー

BIOSTORY

特集

競う

vol. 16

生き物文化誌学会
The Society of Biosophia Studies

SEIUNDO
mook

力を競う——闘う：闘鶏

ばんえい競馬

競う金魚について

姿・美を巡って——朝顔観賞小史

植物を競う

生産の場で品質を競う 牛、豚(共進会)

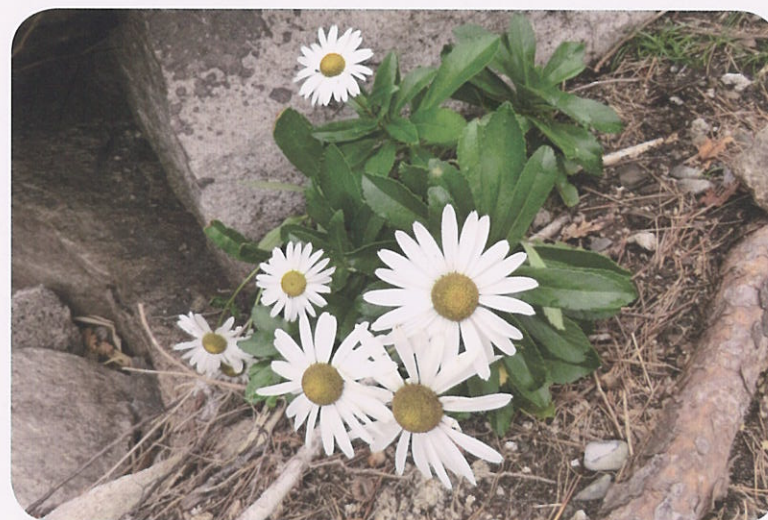
コラム

長鳴鶏の競演

日本の古式競馬

歴史上、農家がいちばん元気だった時代
——「米作日本」にみる農家の多収競争

緊急特集 ● 震災と生き物を考える



BIOSTORY



9784416211342



1929440015001

本体1500円+税

63997-40 ©2012-12

ISBN978-4-416-21134-2

C9440 ¥1500E

特集 競う

目次

力を競う—闘う…闘鶏

秋道智彌

007

ばんえい競馬

古林英一

018

競う金魚について

吉田信行

028

姿・美を巡って—朝顔観賞小史

米田芳秋

038

植物を競う

湯浅浩史

046

生産の場で品質を競う 牛、豚(共進会)

高田勝

057

特集コラム

長鳴鶏の競演—秋篠宮文仁…014

日本の古式競馬—末崎真澄…024

歴史上、農家がいちばん元気だった時代—西尾敏彦…054

—「米作日本」にみる農家の多収競争

緊急特集 東日本大震災—震災と生き物を考える

●東北太平洋岸震災からの復興のために—森誠…072

●「生きもの」を介した人と人の交わりが緩なす絆の大切さを改めて思う 「イトヨ」が結ぶ支援の輪—鈴木康之…082

●淡水型イトヨが生息するまち—震災からの復興に自然と歴史と文化を—佐々木健…085

論文

地域さくら基金助成研究の生活に関わる一本桜—福島県を事例として

鈴木貢次郎

088

小規模漁業における過密な漁場利用と共同管理—タイ・ソンクラ湖の小型定置網漁の事例

岩崎慎平

099

profile NAGASAKA Yoshimitsu

大阪芸術大学写真学科教授。和歌山県高野山生まれ。高野山に住みながら、約40年間高野山を撮影。宗教と文化をテーマに、日本の霊山やアジア各国を撮影。中国大陸を含め延べ15万kmを踏破し、空海の足跡の写真映像化を完成する。米国Weston galleryで常設展。(社)日本写真協会作家賞、和歌山県文化功労賞



表紙写真●永坂嘉光 高野山の朝 塔が多くの歴史と多くの人を彷彿させる (11月始めの撮影)

研究ノート

珍品図鑑

魚皮製衣服—齋藤玲子…001

巻頭言

サメの実像—内田詮三…002

自然を読む

大地と天空から魚を読む—日本とオセアニアにおける海の自然認識—秋道智彌…064

フィールドレポート海外

風と潮に生きるひとびと—スワヒリ海岸キルワ島の魚柵漁—中村亮…068

フィールドレポート日本

日本のカワウソ探し—安藤元一…070

論点

森林という関係価値—阿部健一…108

生き物文化誌必読書

21世紀の〈沈黙の春〉—小長谷有紀…110

生き物文化誌学会情報…111

次号予告・編集後記…112



図2 帯広競馬場にあるイレネー像

図1 ばんえい競馬 (撮影:斎藤友香)



ばんえい競馬

古林英一

キーワード
ばんえい競馬
挽馬
競馬

profile
FURUBAYASHI Eiichi

北海学園大学経済学部教授
京都大学大学院農学研究科博士課程中退、博士(農学)。専門は環境経済学、漁業経済学、公営競技論。主な著書と論文に『環境経済論』(日本経済評論社、2005年)、『日本競馬の現状と制度改革～コスモバルクとハルウララの意味すること～』(『キャンピング・ゲームング学研究』創刊号(キャンピング・ゲームング学会、2004年)、『産地競馬としての「ホッカイドウ競馬」再論—競馬システムにおけるホッカイドウ競馬—』(『北海学園大学経済論集』57巻4号(北海学園大学経済学会、高倉克己との共著)など

1 世界で唯一の競馬・ばんえい

毎週土日月の3日間、北海道十勝平野の真ん中にある帯広競馬場で競馬が開催されている。競馬といえばス

マートなサラブレッドが走路を疾走する姿を思い浮かべる人が多いだろう。だが、ここ帯広競馬場で開催されている競馬はまったく異なったもので、世界広しといえどどこでしか見ることのできない競馬である。ばんえい(挽曳)競馬という。

サラブレッドは大きい馬でも体重五百数十kg程度だが、帯広競馬場で競い合う馬たちの体重はその2倍、1t前後、なかには1・2tを超えるものもいる。もちろんサラブレッドではない。大部分は日本挽系種と名付けられた大型馬であるが、多くの人は「挽馬」とよぶ(図1)。挽馬というのは本来品種を指す言葉ではない。馬の力、すなわち文字通りの馬力の利用法には、「乗る」(騎乗)、「載せ

2 馬力を競う

現在のばんえい競馬は直線200mのセパレートコースでおこなわれる。コースの途中に大小ふたつの「山」がある。スタートラインに近い小さい山が第1障害、ゴールライン側の大きい山が第2障害である。第1障害は高さ1m、第2障害は高さ1・7mである。

重さ450kgの鉄製そりに重量物を積載し、さらに騎手(馬に騎乗せず馬を御するのであるから、正しくは騎手ではなく馭者^{ごしや}というべきであろう)が、他の競馬と同様騎手とよばれている)がその上から馬を御する。

平地競走の場合、平均すれば上位馬の走破タイムは下位馬より速い。しかしながら、ばんえい競馬はそうではない。上位馬のレースはばんえい重量(その自重と積載される重量物の重量の合計)が重く設定されているので、必ずしも上位馬のレースの走破タイムが速くなることはない。それどころか、一線級が覇を競う重賞競走では高重量が課せられるので、重賞競走の方が一般戦より走破タイムは遅くなる。

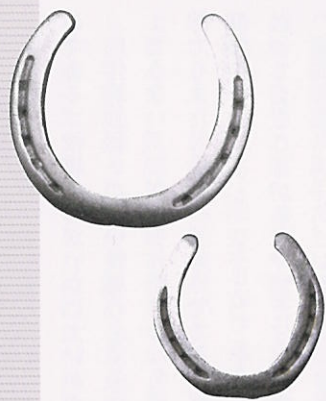


図3 蹄鉄(大きい方が挽馬、小さい方がサラブレッド)

「(駄載)、そして「曳く」(挽曳)の3つがある。騎乗用の馬が乗馬、駄載用の馬が駄馬、そして挽曳用の馬を挽馬という。

北海道の開拓は馬なくしてはあり得なかった。開拓使が設置され、北海道開拓が国策として始められた頃、頼るべき「馬力」は在来種の馬しかいなかった。在来馬は小柄でタフなので駄馬には適していたが、いかにせん挽曳力に劣る。そこで国をあげて西洋種の大馬の導入による馬産改良がおこなわれた。

1910年、1頭の若い雄馬がフランスから北海道十勝の十勝種馬牧場に到着した。イレネー Ienee という名の青毛のペルシユロン種である。遠くフランスから東アジアの厳寒の地にやってきたこの馬は、1928年に死亡するまでの18年間に1074頭もの産駒を残し、十勝ペルと称される一大血族を作り上げた。イレネーの子孫たちは、原野を切り開き、炭鉱から石炭を運び出し、山から木材を下ろし、広大な北海道を縦横無尽に活躍しつづけた(図2)。ばんえい(挽曳)競馬はこのイレネーらの末裔たちによって営まれていた競馬なのである。

なかでも3月末におこなわれる頂上決戦のばんえい記念競走は1tという高重量を牽引するため、最高峰のレースであるこのレースの走破タイムが最も遅いレースとなるのである。およそ競走と名のつく競走で、最高峰に位置づけられるレースのタイムが最も遅いという競技は他にあるまい。

ついでにもうひとつ珍しいルールを紹介する。平地競走に限らず、人間が競う陸上競技でも自転車競技でも、ゴールインはゴール線に体の一部がかかったときをいうが、ばんえい競馬のゴールインは牽引するそりの最後端がゴール線を通じた瞬間をいう。荷物を完全に曳ききってこそ挽馬としての仕事の完了なのである。

そもそも強い挽馬とはどのような馬だろうか。重い荷物を牽引しての競走であるから、肉体的な資質が必要なのはいうまでもない。牽引力は雄大な馬格に裏付けられる。だが、産業界場で使役される馬は、必ずしも大きければ大きい方がいいというわけではない。あまりにも大きい馬は扱いづらい。

産業界場で実際に働いている馬がアルバイ特的に出走していた1960年代までのばんえい競馬では体重が800kgもあれば大型馬とされていた。それくらい今の挽馬より小さかったのである。

産業界場における馬の需要が衰退し、競走馬としての需要が中心になると、馬格は急速に大きくなった。現在の挽馬は体重1t前後である。サラブレッドも決して小さな家畜ではないが、雄大な挽馬に比べればか細くみえてしまう。体重1tを支えるのが太い脚である。当然蹄も大きい。図3はサラブレッドと挽馬の蹄鉄を並べたも

参考文献

- 内田靖夫 1978 『ばんえいまんがどくほん』北海道市営競馬協議会
- 古林英一 2006 『競馬大会から競馬へ—1960年の資料を中心に—(1)』『Hippophile』26:16-25頁
- 古林英一 2007 『競馬大会から競馬へ—1960年の資料を中心に—(2)』『Hippophile』26:7-17頁
- 古林英一 2007 『もうひとつの競馬・ばんえい(競馬)』『ギャンブリング・ゲーミング学研究』3:47-66頁
- 古林英一 2008 『北海道の馬と競馬の歴史』柏村文郎編著『北海道の馬文化と馬の知識』NPO法人とち馬文化を支える会
- 北海道馬産史編集委員会 1983 『蹄跡 つめあと』北海道馬産史編集委員会

が裏切られたときに罵声を浴びるのだ。逆にいえば、期待されない騎手は負けて罵声は浴びない。額の多少ではない。例え少額であっても、いくばくかの金銭を自らの信念に投じるとき、人は皆「勝負師」である。競馬場から遠く離れた場外馬券売場のモニター画面に声援を送る人が少なからずいる。物理的には彼らの声援が帯広の馬と人に伝わることはあり得ない。だが、それでも、勝負師たちの想いは帯広に確実に届いている。勝負師たちの想いはオッズとして表示される。レース前騎手たちはそのオッズを目にしている。自分とそのパートナーである馬に対する勝負師たちの評価は、大なり小なり、騎手のモチベーションを左右する。人気になればプレッシャーになることもあろうし、また逆に、人氣がなければ一泡吹かせてやろうと闘志をたぎらせる。勝負師たちの想いは様々である。競馬場や場外馬券売場は勝負師たちが自らの予想を競い合う場なのである。同じように声援を送っていても、その想いは人によってみな違う。ギャンブルの仕組みからして当然のことだが、

ろん、それによって賞金が多く手にできるということもあるが、決してそれだけではない。競馬は馬の競走であるが、馬主同士が自らの愛馬を競い合う場でもある。自分の期待に応える馬にはそれ相応の「身なり」をさせてやる。意匠を凝らした馬具を愛馬に装着させるといっても馬主の愛情表現のひとつである(図5)。

5 相馬眼を競う

パドック(下見所)を周回する馬を見つめる人たちがいる。騎手に声援が送られることもある。北海道観光で立ち寄る人も少なくないが、毎日のように通い続けている人もいる。通い続けている人は高齢者が比較的多い。なかにはかつては自らも競馬とともに生きていた人もい。彼らの会話をこっそり聞いていると実におもしろい。馬の評価は当然のことながら、「あいつはどうか、こいつはこう」と騎手の人物評価まで、自信満々様々な情報が交わされる。

レースになれば観客から声援が送られる。ばんえい競馬は声援を送りやすい競技である。特に難関第2障害に挑むとき大きな声援が送られる。見ている側からすれば、ここが最も力のこもる場面であり、一番の声援の送りどころなのである。

1年の総決算ともいえるばんえい記念競走など多くの人が集まるレースでは、馬が障害を越える途中、腰をいれるたびに観客から「ヨイシヨイ」という大声援が送られ、そして障害を無事に越えようと拍手が起る。声援はときには罵声混じりとなる。プロの騎手にとって罵声は勲章でもある。期待されているからこそ、期待

他人の勝ちや自分の負けであり、自分の勝ちや他人の負けである。ファンもまた互いに競いあっているのである。競馬場でレースを観戦している人だけではない。道内各地の場外馬券売場やインターネットで投票・観戦する多くの勝負師がいる。勝負師たちの存在がばんえい競馬という営みを成り立たせている。

6 むすび

並外れた馬好きをヒポファイル hippophile という。産業現場で人の生活を支え、北海道を切り開いてきたのは数多くの馬とヒポファイルたちだった。その血脈はばんえい競馬に今も脈々と受け継がれている。互いに競い合う間柄ではあるが、騎手も調教師も厩務員も馬主も、そしてレースに一喜一憂するばんえいファンも、ヒポファイルであるという一点においては一致する。

今やばんえい競馬はインターネットやCS放送でも観戦できる。ぜひ一度見ていただきたい。そして、できれば実際に北海道の大地で馬と人が競い合う様子にふれていただきたい。

付記・本稿の作成にあたり、写真家齋藤友香氏に作品を提供していただいたことに謝意を表す。



図5 馬具 (ガラとよばれる部分他) (撮影:齋藤友香)

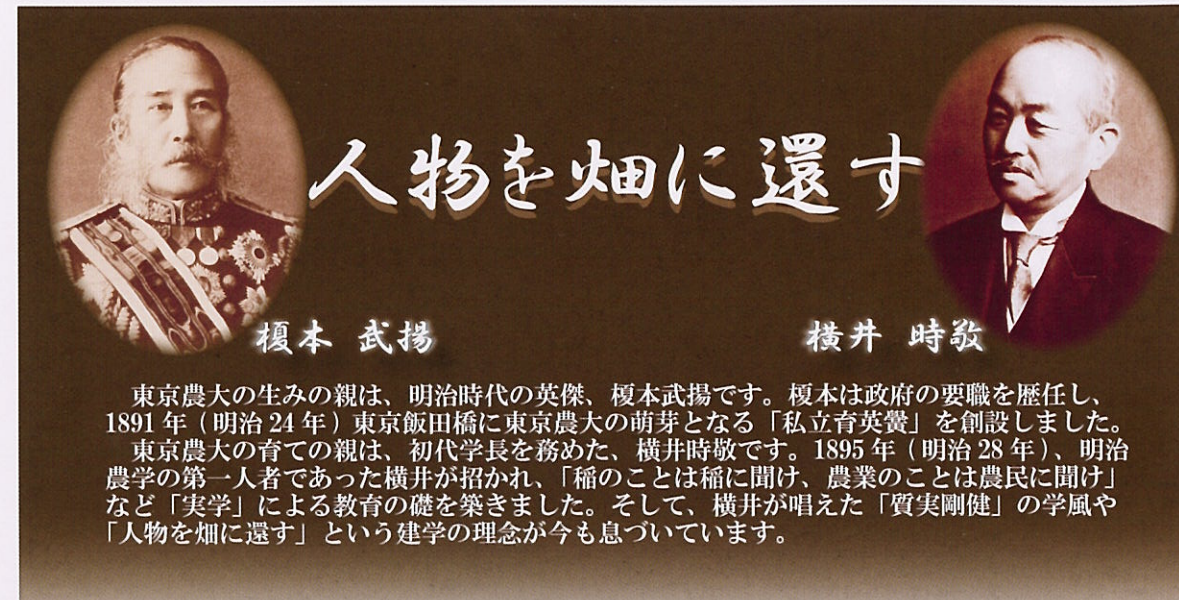
4 馬を競う

かつてのばんえい競馬は産業現場で働く馬と男たちの競馬だった。男たちは、馬主であり、調教師であり、さらに騎手でもあった。その当時、ばんえい競馬の賞金はそう高くなかったという。だが、ばんえい競馬や道内各地で開催されていた競馬大会で優勝するとその馬の価値が高くなる。優勝メダルがあると愛馬が高く売れるという事で賞金よりも優勝メダルの方が経済的価値があるといったこともあったという。

競馬システムの近代化の過程で、まず、馬主と調教師・騎手が制度的に分離され、それから調教師と騎手の職能分離がおこなわれた。こうした職能分離は馬が産業現場から離れ、競馬が唯一の働き場所となっていく過程と重なり合う。

職能分離の完成により、馬主は自らが腕を競い合うのではなく、自分が入手した愛馬を競い合う存在となった。馬主が馬を持つ動機は様々である。ばんえい競馬の馬券発売額が伸び続けた頃はそれに対応して賞金や出走手当(報償金という)がどんどん増額された。報償金の獲得は馬の所有意欲にもつながる。

自分の所有する馬が戦績をあげること馬主にとって最大の喜びである。もち



人物を畑に還す

榎本 武揚

横井 時敬

東京農大の生みの親は、明治時代の英傑、榎本武揚です。榎本は政府の要職を歴任し、1891年(明治24年)東京飯田橋に東京農大の萌芽となる「私立育英費」を創設しました。東京農大の育ての親は、初代学長を務めた、横井時敬です。1895年(明治28年)、明治農学の第一人者であった横井が招かれ、「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」など「実学」による教育の礎を築きました。そして、横井が唱えた「質実剛健」の学風や「人物を畑に還す」という建学の理念が今も息づいています。

学校法人 東京農業大学

東京農業大学 東京情報大学 東京農業大学短期大学部 東京農業大学第一高等学校・中部部
東京農業大学第二高等学校 東京農業大学第三高等学校・附属中学校

お問合せ：広報課 〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1 TEL.03-5477-2300

バイオストーリー編集委員

五十音順
2011年10月30日現在

- 秋道智彌 ◆編集長
- 井関和代
- 岩槻邦男
- 宇根 豊
- 柏原精一
- 桑子敏雄
- 小長谷有紀
- 重田真義
- 菅 豊
- 林 良博
- 松井 章
- 陽 捷行
- 森 誠一

次号予告 BIOSTORY vol.17

2012年5月発行予定

境界——境界を飛ぶ・境界を破る

人と自然の境界、人がつくった自然の境界、自然にかかわる人の境界、いろいろな境界がわたしたちの環境世界には組み込まれている。本特集は、人間が自然とのかかわりのなかでつくりあげてきた境界を動物たちはどう飛び越え、どう泳いでいくのか、あるいは、そこでどう苦しんでいるのか、他方、人間たちは、境界をどうつくってきたか、また、生き物たちから自由を奪っている境界をどう打ち破ることができるのかを論じる。

※都合により誌面内容が変わることがあります。

編集後記

今回の特集は、「競う」である。闘鶏、競馬、闘牛、闘魚など、動物が体をぶつけあって、勝敗を決する場合があるかとおもえば、植物の品評会におけるように奇抜さ、美しさ、大きさを競うなどの場合がある。動物では、1対1で闘う場合や競馬のように複数の個体による速さや力を競わせる場合がある。人間の競技ではいくつものルールが適用されるように、動植物の資質を計る判断基準や規則がいろいろとある。その中味は地域や民族ごとの文化を反映することがある。生き物文化の真髄がみられるわけだ。ただし、動物を闘わせることにたいしてさまざまな意見がある。動物愛護や動物の権利を主張する立場からの反論もある。また、水族館や動物園における動物のショーさえ否定する考えもある。もっとも、広く考えれば動物と人間の関わりは多様であり、競わせるだけが関わりの本質ではない。ミニ特集として震災後の東北を取り上げた。生き物文化誌学会ともゆかりのある岩手県大槌町からのレポートである。今年度の学術大会も時期をずらして11月に開催される。その場でも引き続き、被災地の生き物と人間の関わりを議論していきたい。 【秋道智彌】

生き物文化誌学会 会長 湯浅浩史

生き物文化誌学会事務局

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28(財)進化生物学研究所内

電話◎03-5701-7861 FAX◎03-5701-7861

『バイオストーリー』編集委員会 編集長 秋道智彌

©2011 by the BIOSTORY Editorial Committee

誠文堂新光社の定期刊行物

◎子供の科学◎天文ガイド◎愛犬の友◎MJ無線と実験◎アイデア◎囲碁

◎フローリスト◎農耕と園芸◎陶工房◎デザインノート

BIOSTORY vol.16

2011年12月1日発行

発行人——小川雄一

編集人——貫田 淳

発行所——株式会社誠文堂新光社

〒113-0033 東京都文京区本郷3-3-11

編集 電話◎03-5805-7762 FAX◎03-5805-7766

販売 電話◎03-5800-5780 FAX◎03-5800-5781

HP◎http://www.seibundo-shinkosha.net/

印刷所——(株)大熊整美堂

製本所——(株)プロケード

Ⓒ(日本複写権センター委託出版物)

本誌を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

本誌をコピーされる場合は、事前に日本複写権センター(JRRC)の許諾を受けてください。

JRRC

http://www.jrcc.or.jp

eメール◎info@jrcc.or.jp

電話◎03-3401-2382

ISBN978-4-416-21134-2

裏表紙

大津波に負けず、今年も花を咲かせたハマギク(2011年10月25日大槌湾に浮かぶ蓬萊島にて。撮影◎佐々木健) 花言葉は「逆境に立ち向かう」

